

南の風 430

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

謹んで初春のお慶びを申し上げます。本年もよろしくお願い致します。前号の続きです。

- (3) 「指導者が主で、子どもは従うもの」といった関係性を見直す
- ・指導者は、選手の学びの機会を創出するファシリテーター（サポート役、誘導役、または、潤滑油とも最近は言われる）
 - ・選手を威嚇して教え込むのは、「支配者」であり「指導者」ではない。
 - ・過度な練習量は、指導者による「支配」？「子どもたちに勝たせるために、いっぱい練習させる」、「チームを強くするために練習させる」→ いずれも「主語は指導者」
 - ・「子どもたちが勝ちたいというから、やらせている」→ ここも主語は大人たち。指導者は、故障やバーンアウトを回避するための科学的トレーニングを施す責任がある。
- (4) 支配されると練習時間が長くなる
- ・練習時間が減ると、競技力が衰退する？ 練習すればするほど上手くなる？
 - ・アメリカやヨーロッパ地域では、U15のバスケットボール活動にはオフの期間がある。
 - ・1回の練習時間はどのくらいが妥当？
 - ・「練習は裏切らない」→ 長時間の練習 → 大人によるスポーツの支配
 - ・組織やクラブは、一貫した育成過程の提供、過度な練習量、良質な練習内容、すべての子どもに継続的に試合の出場機会を与える保障をすることが求められる。

VI 「教えないスキル」を磨く

- (1) 心地よい学びの環境を
- ・「今はバスケットボールの練習なのだから集中しなさい」、「練習中に遊んではだめ」、「ここに何をしに来ていますか？」と叱る → 「心地よい学びの場」になる？
 - ・ガミガミと怒られながら「何も分かってないね」と、ネガティブなメッセージ満載の空気の中で、学ぶ雰囲気は生まれるのか？ じゃあ、叱らずに褒めようといえば、褒めてばかりでいいのか？という声上がる。→ そういった言葉がけで刺激を与えるやり方は、見直した方がよさそう。
 - ・時に指導者は、子どもに無理やり高いハードルを跳ばせようとしていたようだ。
 - ・付いて行けなくてふるい落とされた子どもは、もう少し待てば成長できた金の卵だったかもしれない？ 高校や大学で活躍したりプロになったりすることはなかったとしても、一生バスケットボールを愛し、バスケットボールから人生を学んで成長していく人材だったかもしれない → それなのに大人は工夫しないままだった？
 - ・競技を止めずに生き残った子どもだけを育ててきたようだ。さまざまなスポーツの競技人口の減少は少子化だけの問題ではない。心地よい学びを提供してきたかどうか、そこを検証する必要があるのでは。

次号に続く。